

原発避難者の抱える苦悩

Suffering of nuclear accident evacuee

永友 春華 (Haruka Nagatomo) 指導：辻内 琢也

序 章

2011年3月11日14時46分18秒、太平洋三陸沖を震源地としたマグニチュード9.0の大地震が東日本を襲った。その後発生した大津波と東京電力福島第一原子力発電所（以下、原発とする）の事故による放射性物質漏れという三重にもなる災害は、日本を超えて世界中に大きな衝撃を与えた。

本研究は原発事故により長期的な避難生活を送る人々を対象にした研究である。アンケートによる量的研究と避難者への聴き取りによる質的研究を行い、マクロとミクロの観点から原発避難者の抱える苦悩の実態を明らかにすることを目的とする。

第1章 東日本大震災と原子力発電所

東日本大震災は、過去の災害と比較しても類を見ない巨大災害であった。本研究では東日本大震災にともなう原発事故により、放射能汚染から長期的に避難する人々に着目した。避難者たちは全国に広がり、福島県の発表によると2012年2月時点で46都道府県に62,610人にのぼっている。人々の記憶は薄れ、東日本大震災は過去のものとして風化しつつあるが、いまなお東日本大震災を発端とした一連の事故や避難は終わらずにつづいている。

第2章 原発事故による広域避難

【目的】埼玉県内に避難中の福島県の方々の現状を総合的に把握し、今後の支援のあり方を検討し、避難者の実態を捉え、国や県などの行政機関や支援団体にその結果を提示することによって、避難生活の改善を図る。

【対象と方法】本アンケート調査は2012年3月～4月に行われ、対象は埼玉県内に避難中の福島県住民2,011世帯である。福島県災害対策本部・県外避難者支援チーム（埼玉県担当）の協力により、県・市町村の広報誌類と共に各世帯に配送し、郵送による返信を依頼した。回収数は490（回収率24.4%）であった。

【結果と考察】心的外傷後ストレス症状を示すIES-Rの得点が平均36.2という、過去の災害と比較しても極めて高い数値を示した。「仕事の喪失、生活費に心配がある、貯蓄が無い、近隣関係の希薄化、相談者がいない、放射線被曝の

心配」といった多重の社会的要因が、心的外傷後ストレス症状（IES-R）と心理的ストレス反応（SRS-18）の得点に統計学的に有意に影響を与えていた。またアンケート自由記述回答から、『生活費と仕事の問題』、『住居・土地の問題』、『家族・近隣関係の問題』、『補償・賠償の問題』、『国・東電への批判』、『原発・放射能の問題』といった問題があげられ、これらのさまざまな社会的状況が『心身の苦しみ』の元になっているものと考えられた。

第3章 原発避難者の語りより

【目的】故郷を失いつつあるという「喪失」と新たな人生を歩みだした「再生」の物語をまとめることで、避難者の抱える苦悩の実態を明らかにする。

【対象と方法】インタビュー対象は、福島県から埼玉県に避難してきている11人の方である。本研究ではライフストーリーインタビューが終了している弥生さん（仮名）を提示する。

【結果と考察】「自分の人生はだれかがつくっている」と意味づけし、数々の困難や苦悩を乗り越えてきた弥生さんは、今回の震災や避難も、大きな人生のなかのひとつの出来事と捉えている。しかし、「先が見えない」ことによる苦悩や、東京電力や行政への批判、生活や仕事、住宅や土地の問題など、多くの社会的苦悩も浮かび上がった。

終 章

原発避難者たちの苦悩は多岐にわたり、「心理的ケア」だけでなく、「雇用の促進、生活費の安定、コミュニティーの再構築、ソーシャルサポートの確立、放射線被曝問題への対処」といった「社会的ケア」が必要とされている。

桐田克利（1993）が述べるように、生きることには苦悩がついてまわり、私たちはだれひとりとしてその苦悩から自由である人はいない。そうである以上、人は苦悩とともにある人生の中で意味を見出していくことしかできないのである。弥生さんは苦悩の中に希望を見出し、大きな波に流されながらも、たくましく生き抜いてきた。インタビュー調査から、苦悩とともにある人生を歩んでいく姿が明らかになった。